

# 女子中学生の学習場面における行動の特徴と教師による支援

藤浪 万知子

Characteristics of the Learning Behavior of Female Junior High School Students  
and Teacher's Support

Machiko FUJINAMI

## 1. はじめに

日本ではここ数年、女性の活躍を成長戦略の一つの柱として位置づけた政策が展開されているが、学校教育の場で将来の活躍につながるような育ちが女性になされているのかを検証することが大切であると考えられる。そこで本研究では、女子中学生の学習行動の実態と特徴を探り、教師の支援の方向性を見出す手がかりとしたい。

## 2. 問題と目的

第2次静岡県男女共同参画基本計画 第2期実践計画版の静岡県男女共同参画推進条例第2条によると、男女が性別にかかわらずその個性と能力を十分に発揮する機会が確保されていることにより、男女が社会の対等な構成員として自らの意思により職場、学校、地域、家庭その他社会のあらゆる分野における活動に参加し、責任を担うことと示されている。表現を変えれば、男だから、女だからかくあるべしといった枠組に縛られない、男性も女性も多様な生き方が尊重される社会のことであると考えられる。施策の方向として、学校における男女の人権の尊重、男女平等の推進に関する教育・学習の充実が挙げられている。学校でははたして男女がかくあるべしといった枠にとらわれない教育活動ができていであろうか。

志村ら(2014)の全国学力学習状況調査結果の推移分析によると、義務教育修了段階では女子の方が国語も数学も優位の傾向が確認されている。理工系学部への進学に必要な数学の得点に男女格差がないとしたら、学力不足を理由に理工系の専攻を女子が選択しにくいとは考えにくい。また、静岡県の働く女性の割合は47都道府県中33位と低く(2012年就業構造基本調査報告書 内閣府男女共同参画会議専門調査会)、日本全体を見ても2014年のOECDの教育に関する調査で、高学歴女性の3割は就労していないことも明らかにされている。

こうした女子における学力と進路・就業との非対応は、どのような要因によって生み出されているのであろうか。本研究では、子どもたちが性別にとらわれることなく、誰もが自分らしさを発揮し、将来社会で活躍しようと思うようになる基礎となる教育活動や教師の支援のあり方について検討する手がかりを得るために、学習者としての女子中学生の特徴的傾向を明らかにするとともに、それに応じたより適切な教師の働きかけのあり方について考察することを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 中学生における学校生活及び生き方・職業に関する意識の実態調査と、女子卒業生へのインタビュー調査

中学生における学校生活および将来の生き方・職業に関する意識の実態調査では、今の中学生たちは学校生活や将来の生き方、職業に関してどのような意識をもっているのか、そこに男女の

意識の差はあるか、それらの現状を明らかにするために、県内5中学校の合計920名に対して質問紙調査を行った。質問項目は以下の4領域42項目に整理した。

- ①中学生の学校生活に対する意識 9項目      ②中学生の将来の選び方に関する意識 10項目  
③中学生の職業に関する意識 10項目      ④中学生の職業決定に関する意識 13項目

上記の領域からなる質問項目を用意し、調査対象とした中学生に5件法で答える形式で評価を求めた。個人の情報としては所属学年、性別のみ記入を求めた。また、好きな教科、将来就きたい職業とその理由を自由記述する項目も設けた。さらに高校生、大学生、社会人女性に対して進路に関するインタビュー調査を行い、自分のこれからの生き方や進路に関する展望（本研究では「キャリア観」と呼ぶ。）をどのように考えているかを聞き取った。

## (2) 授業者から生徒への対話に見られる性差

教師から生徒への働きかけも生徒の発言も、女子より男子の方が多という隠れたカリキュラム（木村，1999）の存在を調べるために、小学校4年生から中学校3年生までの授業を19時間観察し、教師から生徒に発せられた対話の回数をカウントした。授業は教科、授業者の性別や年齢、学年が分散するように選択した。

## (3) 教科授業とグループアプローチの授業における女子中学生の学習行動観察

教科授業における女子中学生の学習行動では、授業というミクロの次元に着目し、女子中学生が授業の中でどのような役割を示すかを理科と国語の授業で観察を行い、発話記録及び行動記録を収集した。その際には授業の形態にも着目し、問題解決型学習と応答型学習でのあらかのの違いを検討した。グループアプローチの授業は同じ学級で4回の実践を行った。男女観、キャリア観を共通のテーマとして設定し、女子中学生の学習行動の特徴を探った。授業での課題に対する生徒の反応から中学生の男女の性役割観を、抽出生徒の授業後の感想から女子中学生の学習行動の特徴とキャリア観の特徴を探るとともに、それらを踏まえた教師の働きかけのあり方について検討した。

## 4. 研究の結果

### (1) 質問紙調査とインタビュー調査の結果

① 質問紙調査の回答結果に対し、主因子法による因子分析を行った。その結果6つの解釈可能な因子を抽出した。中学生が将来の自己像を描くときに影響を受けている因子は【自分らしさ、適性の自己認知】【自立心】【目標の具現化】【自己実現】【社会や家族からの影響】【未来への柔軟性】で、これら6つから構成されていることが示唆された。

② 【自分らしさ、適性の自己認知】及び【自己実現】の2つの尺度得点は女子の方が有意に高かった。

③ 男女間の得点平均値の差が非常に大きかった項目（有意水準0.1%）は以下の通りであった。

- ・先生に言われたこと（宿題、係の仕事など）は必ずやろうと思う。      （男子3.96,女子4.37）
- ・授業中によく発表する方だ。      （男子3.00,女子2.40）
- ・授業中に先生によく注意される方だ。      （男子2.46,女子1.91）
- ・社会人になったら重い責任のある仕事内容は任されたくないと思う。      （男子3.11,女子2.84）
- ・将来会社を選ぶときには高い給料がもらえることを一番に重視したい。      （男子3.30,女子2.94）

- ・もし結婚したとしても、職業をもって働きたい。(男子 4.51, 女子 4.00)
  - ・会社や社会で出世したい。(男子 4.07, 女子 3.69)
  - ・将来は自分の給料で家族を養いたい。(男子 4.31, 女子 3.69)
  - ・どんな職業でもやりがいはあると思う。(男子 3.73, 女子 4.04)
  - ・女性は結婚や出産があるから大変な職業は避けた方がいいと思う。(男子 3.25, 女子 2.55)
- ④ 下記の 9 項目の得点は女子の方が有意に高かった。(有意水準 5%, 一部は 10%)
- ・学校の授業では、先生は男子と女子を平等に指導していると思う。(男子 3.17, 女子 3.36)
  - ・先生に言われたこと(宿題、係の仕事など)は必ずやろうと思う。(男子 3.96, 女子 4.37)
  - ・職業を選ぶ時は会社の名前や給料の多さより仕事内容を大切にしたい。(男子 3.41, 女子 3.59)
  - ・将来の夢について考えることが多い。(男子 3.34, 女子 3.55)
  - ・たとえ正社員ではなくても自分のやりたい事ができる職業につきたい。(男子 3.09, 女子 3.33)
  - ・どんな職業についたとしても、人の役に立てるようにがんばりたい。(男子 4.19, 女子 4.36)
  - ・どんな職業でもやりがいはあると思う。(男子 3.73, 女子 4.04)
  - ・中学校卒業後の進路について親や保護者と相談する。(男子 3.83, 女子 3.99)
  - ・進路を決めるために親や保護者の意見を参考にしたい。(男子 3.25, 女子 3.50)

女子は職業に関して積極的な考え方をもっている反面、地位や報酬を得ることや、働き続けることに関して男子よりは消極的である傾向が読み取れる。

⑤ 女性へのインタビューから、母親の職業そのものやキャリア観は少なからず影響を与えていて、それは中学時代より高校生、大学生に進むに従い強くなっていることが示唆された。これは、中学生の時には見えなかった社会の構造が主に母親を通して見るようになることから解釈可能であり、母親世代のキャリア観の多様性が女子生徒のキャリア観の多様性に影響すると考えられる。

⑥ インタビューでは(1)の下位尺度【自分らしさ、適性の自己認知】【自立心】【目標の具現化】【自己実現】【社会や家族からの影響】【未来への柔軟性】に類似する言葉が発せられた。質問紙調査項目と同様の内容をインタビュー対象者の女性が発言していたことは、本研究で採用した尺度が妥当であることを示している。

## (2) 授業者から生徒への対話に見られる性差

授業者から男子に向けられた発話回数は女子よりも多く、観察した全授業を平均すると男子への発話回数が 67.3%であったのに対して女子には 32.7%であった。男子になされている割合が教科や校種の違いに関係なくほぼ一貫して高く、この結果は教科担任の性別・年齢や授業科目とも関係しなかった。男子への相互作用が最も多かったのは音楽(小学校 4 年生)で 90.5%、女子への相互作用が最も多かったのは国語(6 年生)で 58.5%であった。

## (3) 教科授業とグループアプローチの授業における女子中学生の学習行動観察の結果

① 問題解決学習の授業で観察した場面での女子中学生の発話は社会的志向が強く、男子は課題解決志向が強いことが示された(表 1)。なお、社会性志向とはメンバーの発言をつないだり、他者を評価したりする発言のことを指し、課題性志向とは課題解決に結びつく発言のことを意味している。これらの分類は大学院生 3 名及び大学院教員の 4 名の合議により行った。

表1 観察授業場面での男女別の社会性志向，課題性志向の発話量の比較

	社会性志向の発話量	課題性志向の発話量
男子	33回/168回(19.6%)	57回/168回(33.9%)
女子	61回/168回(36.3%)	17回/168回(10.1%)

② 応答型学習での女子中学生の学習行動は理科の場合でも国語の場合でも「沈黙」と「従順さ」によって特徴付けられる。応答型の授業では女子生徒は教師の指示に素早く黙って従順に従う姿が多く見られた。

③ 男らしさ，女らしさをテーマとして行ったグループアプローチの実践では，男女ともに社会から要請されている男性像・女性像と，自分もっている男性像・女性像で迷い葛藤する様子が見られた。学級でリーダー的な活躍をしている女子生徒が，自分のクラスのリーダーは男子だと答えていたように，実際の行動と認知とが対応していない回答も見られた。中学3年生の女子は，社会から要請されている女性像を認識しており，自分の価値観と求められる女性の性役割とを比較，往還をしている様子がうかがえた。

## 5. 考察

### (1) 実態調査とインタビュー調査から

インタビュー調査と質問紙調査の結果，質問紙調査の下位尺度として示された【自分らしさ，適性の自己認知】の「先生に言われたこと（宿題，係の仕事など）は必ずやろうと思う。」「将来の自分の生き方を決めるときに，今の学校での勉強や生活を役に立てたい。」とする傾向がとくに女子に強いことが示された。ここから将来の自分に夢や希望をもち人の役に立てる人間になりたいと学校生活をがんばる女子中学生の姿が浮かぶ。現在中学校で行われているキャリア教育では，職場体験学習，職業人の講話，職業調べなどから，自分の就きたい職業を見つけさせ，中学校3年次における進路指導は，希望の職業に就くにはどの進路が近道であるか，そのためにはどの程度の学力が必要になるかなどが筋道とされている。学校でのこの進路学習で意欲が喚起される女子生徒は多い。しかし，調査結果を詳しく見ると，そのような生徒ばかりではないことがわかる。社会や家族からの影響を受け，自分の希望も描きながら，進路に迷ったら親や保護者が薦める方を選ぶことや，女性として社会からの要請に応えようと考えている生徒もいることが示された。これらを考察すると，女子中学生のキャリア教育で大切なことは自分の軸を見つけることではないだろうか。自分にとって大切な価値観は何かを知れば職業の選択肢が広がり，中学生段階では就きたい職業が見つからなくても，将来多くの職業の中から自分で選び取っていく力が養われる。インタビューからは高校生や大学生，社会人になったばかりの世代の女性は，社会は自分から離れた場所に存在し，その社会は主に働く男性がつくっており，そこに少しだけ女性も入ってくるようになったと見なしていることが推察され，まして中学生にとっては，社会とはまだ遠い存在であろう。これらのことから，働くことの意義や働き方について中学校時代から考えていくことは，職業調べ，上級学校調べと同等に重要な機会となるのではないかと考えられる。教師の働きかけによって，学校教育で生徒たちの意識を少しずつ社会に向けていくことや，あまりにも偏ったものの見方を改善することはできるのではないかと考える。

## (2) 授業者から生徒への対話に見られる性差

授業では男子生徒は「雄弁」で、女子は「沈黙」する。これは教師の性的対応の相違だけではなく、子どもたちの行動の性差によって生じている面もあると考えられる。男子生徒との相互作用を増やしていた授業者は、それにより授業の統制を図っていたり、発言の多い授業づくりをねらっていたりしていた。しかしながら質問紙調査では、「学校の先生は男子と女子を平等に指導している。」という項目に対して、女子の方が有意に高い結果であった。つまり、女子生徒にとって教師との信頼関係は、対話の量よりも教師の関わりの姿勢という質的な側面が重要であると考えられる。女子生徒が自ら選択して行っている学習行動を、たとえそれが従順であったり、沈黙することであったりしたとしても、教師との対話の一つの形態として認め、受け入れる姿勢が教師には重要であると考察する。

## (3) 教科授業とグループアプローチの授業における女子中学生の学習行動観察

① 男子は課題性志向からくるレポート的談話を、女子は社会性志向からくるラポータ的談話を特徴とする。授業での話し合いは、レポート的談話とラポータ的談話が絡み合っておりよりよいものへと発展していくと考えられる。授業では男子のレポート的談話が教師の高い評価を受け、女子のラポータ的談話は教師の評価が低いことは否めないが、女子のラポータ的談話によって、男子のレポート的談話が促進され、話し合いが充実するようになる側面を教師はもっと評価する必要があると考える。

② 抽出女子生徒3名の感想の変化を追い記述内容を分類した。感想は以下の5つのカテゴリーに分類することが適当であると判断した。生徒はある価値観を学習するとき、次のⅠからⅤのステップを行きつ戻りつ、Ⅴに向けて内面化していく。なお、カテゴリーの名称と定義、分類規準は教職大学院担当教員4名と現職大学院生3名の合議により行った。

- Ⅰ自己を見つめる。 Ⅱ自分と他者を比べ共感や反感をもつ。 Ⅲ自分と他者を比べ再び自分の価値観を内面化する。 Ⅳ所属集団にある価値観と自分の価値観を比較する。  
Ⅴ自分の価値観で社会を見つめる。

## 6. 今後の課題

### (1) 性差に着目した学力分析を

日本では性差に着目した学力分析はほとんどなされておらず、関心が向けられることも少ない。全国学力・学習状況調査においても、文部科学省による結果分析の際に男女差は考慮されていない。ただし、そのデータを使用し「効果のある学校」の特徴を探るといった目的のもとで行われた委託事業においては、性差についての検討がなされており、数学・算数では男女差は見られないものの、国語ではA問題・B問題ともに女子が男子を上回っていることが示されている。PISA調査においてもほぼ同様の結果が提示されている(志水・伊佐・知念・芝野, 2014)。

本研究で実施した生き方に関する質問紙調査でも人の役に立てるようにがんばりたいという項目評定値は女子の方が有意に高いが、志水ら(2014)が行った調査では女子は、自分は頼りない人間だと思い、人より優れたところはないという自己認識を男子以上にしているという結果が出ている。つまり、女子の学力の優位性が必ずしも女子の低い自己評価を改善するものにはなっていない。将来の女性の達成意欲を高めるためには、女子があえて表面には出さない積極的な行動

を教師が見つげ出し、承認することで女子の低い自己評価を改善することが可能であると考えられる。

## (2) 男女格差を生むのは周りの大人、学校では教師であることの認識を

PISA 調査は学業成績の男女格差は生まれつきの能力差によるものではないことを示している。そして男子と女子の両者がもてる能力を十分に発揮し、社会の経済成長と福利厚生に貢献できるようにするためには、保護者、教師、政策決定者、オピニオンリーダーが一致協力する必要があると示唆している(OECD, 2015)。本研究で示されているように、男女間に学力差が見られないにもかかわらず、授業場面においては男子の方が課題解決志向的な発言が多く、実際に授業中の対話に関しても教師は多くを男子生徒に向かって発信し、それを通して授業の展開を図ろうとしている。つまり、男女格差を生むのは子どもの能力差ではなく、周りの大人がもっている性役割分業観であり学校場面では教師が暗黙のうちに期待している男子生徒・女子生徒に対する役割の相違である。

## (3) 自分の「軸」に基づく価値観を見つけていくキャリア教育を

本研究の結果は中学校におけるキャリア教育のあり方を再考するための手がかりを提示していると考えられる。中学校のキャリア教育のほとんどは、職業そのものや就労することに焦点を当てている。また、職場体験学習はかなり狭い範囲に限定されているほか、体験することが重要視され、職業に就くことが個としての人間形成や将来を見通した自身のキャリア形成にどのように結びついていくのかという視点からの問いかけは弱いといわざるを得ない。そこでこれからの中学校におけるキャリア教育の方向性については、とくに女子中学生にとっては単なる職業選択に留まらない、自らの将来の生き方を展望する上での基軸となる価値観を身に付けるような指導、つまり“自らの生き方の探求”を図ることができるような内容を加味することが有益であるように思われる。もちろんそれは男子にも有益であろう。

## 7. おわりに

本実践的研究に取り組む中で10代から50代までの約30名の女性に自らの生き方について語ってもらった。また実習校では約380時間を女子生徒たちとともに活動し、これからの社会での女性の活躍とは何かを考えてきた。こうした経験を踏まえた現在、若い世代の女性にとっての学校における学習行動は自らの人生を創り出すことに密接に関連する可能性があることを指摘したい。女子生徒が自発的に学習を進めるには、人として対等な教師と生徒の人間関係づくりに基づいた学級経営や授業経営が大切である。先人の叡智や人としての価値観を学ぶ教室で、教師が自分の望む答えや価値観に強引に導くことなく、教師と生徒とがともに考え、悩み合い、対話し、将来を模索する教室であれば、女子生徒は安心して教師に対して自己開示をし、自己の価値観をしっかりと内面に定着させることができると考えられる。

### 【主要参考文献】

- エリザベス・ヘイズ, ダニエル・D・フラネリー編著 入江直子・三輪建二監訳(2009). 成人女性の学習—ジェンダーからの視点からの問い直し— 鳳書房  
木村涼子(1999). 学校文化とジェンダー 勁草書房  
志水宏吉・伊佐夏実・知念渉・芝野淳一(2014). 調査報告「学力格差」の実態 岩波書店